



Title	《資料紹介》「中京新聞」の「原子小説」
Author(s)	齋藤, 理生
Citation	阪大近代文学研究. 2024, 22, p. 96-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95297
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「中京新聞」の「原子小説」

斎藤理生

一 「中京新聞」の文化欄と新延修三

本稿では、敗戦直後の新興地方紙「中京新聞」に掲載された超短編シリーズ「原子小説」を紹介する。「中京新聞」は、国立国会図書館および名古屋市鶴舞中央図書館に所蔵されているマイクロフィルムを閲覧してもらった。

明治期以来、新聞にはさまざまな文学作品が発表された。敗戦直後も例外ではない。ただ、物資不足で二面しかなかった当時の新聞には、文学作品に割ける紙面の余裕が限られていた。

新聞に掲載される文学作品として、最も思い浮かべられやすいのは連載小説であろう。しかし「朝日新聞」や「毎日新聞」のような全国紙が、戦前のように連載小説を再開するまでには時間がかかった。毎日ほぼ必ず小説が掲載されるようになるのは、「朝日新聞」では石坂洋次郎『青い山脈』（朝日新聞）一九四七・六・九〜一〇・四、一一七回）以降、「毎日新聞」では林芙美子『うず潮』（毎日新聞）一九四七・八・一〜一一・二四、一一五回）以降である。

一方、地方紙、特に新興紙においては、競合他紙との差異化による売り上げの増加をねらって、しばしば小説が掲

載されていた。疎開していた作家も多く、規模の小さな新聞に、中央の有力な作家が寄稿することがあった。「中京新聞」もそのような新聞の一つである。

「中京新聞」は、一九四六年八月一日から一九五一年五月六日まで、愛知県名古屋市中で発行されていた夕刊紙である。その全貌は、井川充雄『戦後新興紙とGHQ 新聞用紙をめぐる攻防』①にくわしい。ここでは要点だけをまとめておく。この新聞は、「朝日新聞」の協力紙の一つであった。GHQの方針で全国紙が部数を増やせない時期に、名古屋という、県紙「中部日本新聞」がシェアを占める要所を押さえる将来の布石として創刊された。発行部数は約八万四千部で、既存紙と併読されたと思しい。

この頃「朝日新聞」と「毎日新聞」とは、全国で同じように新たな新聞を協力紙として立ち上げていた。名古屋では「朝日新聞」系の夕刊紙として「中京新聞」の姉妹紙である「夕刊新東海」、「毎日新聞」系の「東海毎日新聞」、「中部日本新聞」系の「名古屋タイムズ」が創刊され、乱立状態であった。これらのうち「中京新聞」は、文化欄が充実していたことが特徴である。井川前掲書では、次のように説明されている。

当時、一枚二頁の新聞の時代に、『朝日新聞』を含め、他の新聞は週に一回程度しか「文化欄」を設けていなかった。『中京新聞』は、それを毎日設け、尾崎一雄や丹羽文雄といった当時の知識人、文化人による文章を掲載した。(中略) 同時期の『中部日本新聞』には、文化欄がほとんどなかった。この点からも、『中京新聞』が、「文化欄」に力を入れており、そこで独自性を出そうとしていたと言いうことができるだろう。(一六〇—一六一頁)

他紙と差異化されるこの文化欄には、しばしば文藝記事が掲載されていた。単発的な随想や評論が掲載されるだけでなく、魅力的な連載や特集も組まれた。本稿で紹介する「原子小説」もその一つである。なお、「中京新聞」が創刊当時から掲載していた連載小説は、以下のとおりである。

大佛次郎(横山泰三)『姉』(一九四六・八・一〜九・三〇、六〇回)
 丹羽文雄(三好悌吉)『十字路』(一九四六・一〇・一〜一九四七・一・九、九一回)
 藤沢桓夫(田村孝之介)『牧歌』(一九四七・一・一〇〜五・九、一〇五回)
 石川達三(初山滋)『幸福の限界』(一九四七・五・一三

〜八・二六、九〇回)
 林房雄(宮田青畝)『真昼の花』(一九四七・八・二七〜一二・二一、一一〇回)
 深田久弥(杉本健吉)『女の幸福』(一九四七・一二・二四〜四・二二、一一六回)
 林芙美子(脇田和)『妻と良人』(一九四八・四・二三〜九・二六、一五二回)
 眞船豊(水谷清)『陽気な家族』(一九四八・九・二七〜二・二五、一四八回)
 秋田實(都築敏三)『繭と蝶々』(一九四九・二・二六〜三・一四、二〇回)
 吉川英治(新井勝利)『続・太閤記』(一九四九・三・一八〜一〇・一五、二二〇回)
 尾崎士郎(野間仁根)『花やかな男』(一九四九・一〇・一六〜一九五〇・一・二二、九五回)
 石川達三(生沢朗)『古き泉のほとり』(一九五〇・一・二二〜六・八、一三六回)
 林芙美子(森田元子)『あはれ人妻』(一九五〇・六・一〇〜一一・一四、一五八回)
 今日出海(中村琢二)『いろは紅葉』(一九五〇・一一・一五〜四・一五、一五〇回)
 山本周五郎(宮川仁)『火の杯』(一九五〇・四・一六〜五・五?、二〇回)

戦前から文壇で活躍していた作家が多数起用されてい

ることがわかる。なぜ創刊されたばかりの地方新聞に、これだけの流行作家たちが書いてくれたのだろうか。そこには、新延修三という記者が介在していると思しい。

新延は、著書『朝日新聞の作家たち 新聞小説誕生の秘密』の「あとがき」^②で、自分のキャリアを、一九二八年に「朝日新聞」に入社し、その大半を学芸部で「新聞小説の発掘と高尚に時をすごした」と説明している。その戦中戦後に関するより細かい情報は、同書の「丹羽文雄」の項で説明されている。

僕は、太平洋戦争勃発とともに昭和十七年マカッサル支局に赴き、翌年ジャワに転じて朝日新聞特派員兼ジャワ新聞社員として働き、終戦後、ガラン島、シンガポールのジュロンでの捕虜生活を終えて、二十一年二月にデング熱にもマラリヤにもかからずに無事帰国、その年の八月から千葉雄次郎と組んで、名古屋で新興紙『中京新聞』の仕事をした。

これが三年半。そして、二十四年の暮、名古屋で戦時中、中絶していた朝日新聞が印刷発行される事になったので、予定の撤収をして朝日新聞に舞い戻った。^③

このように新延は、戦争中は外地の新聞に、戦後は地方の新聞に外向していた。「予定の撤収」というのは、「朝日新聞」が夕刊を発行できるようになるまでの名古屋勤務だ

と、事前に言い含められていたのであろう。

敗戦直後の新興紙には、新延のような、戦前から全国紙の新聞小説の担当者として作家たちと交流していた記者が在籍することがあったのである。新延は、かつて培ったコネクションを活かして「中京新聞」に書いてもらった結果、全国紙に匹敵するような陣容を整えることができた^④。それは新延側にメリットがあったことはもちろん、尾崎士郎や林房雄のような、公職追放されていた作家たちにとつても、活躍の場を得られるメリットがあった^⑤。

では、連載小説以外の、文化欄における作家たちの関わりは、どのようなものであったのだろうか。紙面を通時的に眺めると、文学者の文章は他にも多く見つかると、なかでも目を引くのが、一九四七年の秋から冬にかけて、一面の下の方に継続的に掲載されていた「原子小説」である。

二 「原子小説」の実態

「原子小説」は、四〇〇字程度で完結する超短編小説のシリーズである。その全五七編のリストが以下である。すべて一九四七年の「中京新聞」の一面に掲載された。

一〇月六日	初恋	上田廣
一〇月八日	うつけみ	岡田三郎
一〇月九日	神経	小堀安雄

一月二〇日	正直な強盗	乾信一郎	一月六日	重い荷	井上康文
一月二一日	共産党	斎藤悦二	一月七日	愛	秦賢助
一月二二日	母親	神崎清	一月八日	一ツ家	藤島一衛
一月二三日	婆さんの帽子	石原文雄	一月九日	かりせりふ	穎田島二郎
一月二四日	あやまる	武野藤介	一月一〇日	手の言葉	牧屋善三
一月二六日	たそがれ	浜本浩	一月二二日	おむつ	磯田敏夫
一月二七日	なぞの果て	原奎一郎	一月四日	ある結婚	沢野久雄
一月二九日	鞭	石塚友二	一月五日	煙草	細野孝二郎
一月二〇日	雀	加藤武雄	一月六日	夜の電車	池沢茂
一月二一日	舞踏会	大滝重直	一月一七日	小さいから	松田解子
一月二二日	日に何度	打木村治	一月一八日	悪魔と若い夫人	細田源吉
一月二三日	情死	岡戸武平	一月一九日	薄暮	原田種夫
一月二四日	江馬細香	田辺耕一郎	一月二〇日	パンパンガール	牧野吉晴
一月二五日	大岡さばき	辰野九紫	一月二二日	身の果て	瀬川健一郎
一月二六日	娘と河馬	川上喜久子	一月二三日	秋	石浜恒夫
一月二七日	九時間半	北島八穂	一月三日	西鶴像	木下満
一月二八日	浮世	柴田錬三郎	一月四日	軌道	杉山平一
一月二九日	心中	北條誠	一月五日	夜宴	吉井栄治
一月三〇日	女の運命	小原のぶ	一月六日	蔵	長沖一
一月三一日	幸不幸	藤森成吉	一月七日	易	後藤鴨平
一月二日	帯	森清之	一月八日	ある風景	堀場正夫
一月二日	昔の女	鎌原正巳	一月九日	彼の死	草場洋一
一月三日	子供	大庭さち子	一月二〇日	少年	庄野潤三
一月四日	試験	太田千鶴夫	二月一日	恋わたるべき	宮田喜雄
一月五日	正直者	藤沢恒夫	二月二日	初夜	峯朝太郎

二月三日	昔の女	木谷徹
二月四日	十七歳	河本純夫
二月五日	蔵書家	南越三
二月六日	船橋家の兄弟	北村寅治

注目されるのは、執筆者の幅の広さである。フランスからコントという形式を輸入したと言われる岡田三郎。昭和初期から多くのコントを書き、雑誌「コント倶楽部」を主宰した武野藤介。コントを多数掲載した雑誌「新青年」の編集者であり、執筆者であった乾信一郎や岡戸武平（岡戸は名古屋在住の作家でもある）。ユーモア作家の辰野九紫。一九五〇年代以降、大衆小説家として人気を博す柴田錬三郎。プロレタリア文学者の藤森成吉、細田源吉、松田解子、細野孝二郎。農民文学者から児童文学作家になっていった打木村治。横光利一門下で、俳人でもあった石塚友二。兵隊作家として著名な上田廣。大衆文学作家で、海軍報道班員でもあった浜本浩。昭和一〇年代に新進作家として注目された川上喜久子、北條誠。そして関西在住の人気作家だった藤沢桓夫と、その「辻馬車」以来の仲間だった長沖一と神崎清。やはり関西の詩人の杉山平一、後に中央で作家として名を馳せる庄野潤三、新聞記者と作家を兼ねた沢野久雄、瀬川健一郎、吉井栄治など、多彩な顔触れが一日ごとくに作品を発表していたのである。

作品の内容は作家によってまちまちであるが、今日の眼から見れば、この時代ならではの空気を湛えた題材が印象

的に映る。斎藤悦二『共産党』には列車内で物をねだる戦災孤児が、大庭さち子『子供』には復員したばかりで息子になつかれない父親が、井上康文『重い荷』には闇屋になった青年が、牧野吉晴『パンパンガール』では駅前で身をひさいでいると思しき女性との対話が描かれる。そのような「原子小説」のサンプルとして、浜本浩『たそがれ』の全文を次に掲げる。

夕方のラッシュアワーに、有楽町駅のホームで、泥棒泥棒とけたたましい女の声がひとこみを掻き分けて追って来た。

そのとき私に突き当たった男がちやりと音を立て、女持の買物袋私の足許に落した。女は飛びついて袋を拾いとると、さつさとまた人混みを押し分けて去って行つた。袋を落した男は、何だ、何だと、けろりとして、あたりを見回した。その様子がいかにも白々しくて腹が立つたが私はその男の手口を見ていないしそれに女が立ち去つたあとには、何ひとつ、その男が泥棒である証拠が残つていなかった。

「女て、勝手なものだな」と群衆の一人がいった。

「自分の袋さえ取りかえしたら、泥棒がいようと何がいうと問題じゃないからな」

だが、誰一人その声に相槌をうつ者もなく、折柄停つた電車の昇降口へ、先を争つて殺到した。ふと仰いだビルディングのてつぺんを、新聞社の電光ニュースが、

きりきりと光りを曳いて走っていた。

東京の中心部において、平時であれば大騒ぎになったであろう窃盗事件が、衆人環視の中、曖昧に見送られ、すぐに忘れられる。新聞社のビルに輝く電光ニュースでは、そうした巷の騒動とは別種の報道がなされているのである。敗戦直後の風景を切り取り、世相の一端を巧みに浮かびあがらせた作品である。

当時の地方新聞や新興紙の限られた紙面に、読み切りの超短編小説が掲載されること自体は珍しくなかった。新聞に、文化や娯楽を求める声が多かったのだと推察される。一九二〇年代に流行し、根付いた形式が、戦後、限られた紙面を活かす手段となった^⑥。しかし、週に一回程度のペースではなく、紙面に空きができた穴埋めでもなく、約二ヶ月間、毎日のように掲載され続けている例は稀である。そこには、敗戦直後のメディアおよび社会における文藝の現在とは異なる存在感がうかがわれる。

先に掲げたリストにおいて、今日のみから見て最もネームバリューがあるのは、この八年後に芥川賞を受賞し、「第三の新人」の一員として知られるようになる庄野潤三であろう。ただ、庄野が本格的に評価されるのは、一九四九年発表の『愛撫』以降である。当時は高校教師が本業で、いまだセミプロに留まっていた庄野が、地方新興紙とはいえなぜ新聞の一面に作品を発表できたのだろうか。

ここで注目されるのが、藤沢恒夫の存在である。先のリ

ストのうち、磯田・沢野・池沢・瀬川・石浜・杉山・吉井・長沖・庄野の九人は、藤沢を中心とする同人雑誌「文学雑誌」に執筆経験がある。掲載時期も一月中旬以降に偏っている。これらのことは、同年上半期に「中京新聞」に連載小説を書いていた藤沢による紹介や推薦があつた可能性を示唆していよう。すなわち、新延のような記者に加え、藤沢のような関西文壇の中心的存在の人的ネットワークも活用することで、地方新興紙の意欲的な企画が成立したのではないだろうか。

「中京新聞」には、この翌年にも「友を語る」「豆自伝」などのコラムに著名な文学者が起用されている。「友を語る」は友人についてのコラムで、「豆自伝」は、自分のプロフィールについてのコラムである。「友を語る」には、伊藤整や尾崎一雄のような著名な作家に加え、水原秋桜子や山口誓子ら俳人も書いており、棟方志功、鍋井克之、三岸節子、向井潤吉のような画家の名前もある。「豆自伝」には、ここまでにあがってきた執筆者に加えて、江戸川乱歩、上林暁、中河與一、火野葦平、村山知義らが執筆している。新進作家であつた椎名麟三や三島由紀夫が名を連ねていることも無視できない^⑦。

このように、「中京新聞」は、地方新興紙としては例外的なほど文化欄を充実させていた。敗戦直後の地方新興紙では、「夕刊新大阪」が文化新聞として有名であるが、「中京新聞」も同様の観点から見直されるべきであろう。その背後には、「朝日新聞」はもちろんのこと、新延修三や、藤沢

桓夫の人脈があった。特に新延に典型的なように、敗戦直後には、疎開や復員を通じて、思わぬ形で人が移動していた。その力を得て、全国各地で、中央の雑誌や単行本中心の文学史では見えにくい、独自の文学作品の生産と享受が行われていた。それも被占領下の、あるいは戦後文学の一面として記憶されるべきであろう。

注

(1) 世界思想社、二〇〇八。特に第II部「戦後新興紙の盛衰」を参照。

(2) 波書房、一九七三、二四九頁

(3) 新延前掲書、一四五頁

(4) 新延書の「石川達三」の項には、流行作家となっていた石川が、新延のために一肌脱いでくれたことが語られている。

(5) ただし、「中京新聞」は朝日新聞の協力紙なので、これら連載小説は「中京新聞」単独ではなく、「都新聞」など、他の朝日新聞系列の地方新興紙と重なっている。むしろ、そうした「相乗り」状態だったために原稿料もはずめたことも、新延書の「尾崎士郎」の項で語られている。

(6) その具体例としては、拙稿「研究ノート」『けし粒小説』とその時代―敗戦直後の「朝日新聞」大阪版および名古屋版の創作欄」(『阪大近代文学研究』二〇一八・三)、「新発掘・坂口安吾「復員」とその背景」(『新潮』二〇一八・四)、「解説・三島由紀夫「恋文」の位置」(『新潮』二〇二二・五)、「資料紹介」『朝日新聞』大阪版および東京版におけるコント(一九五〇―

一九五二) (『阪大近代文学研究』二〇二三・三) などを参照されたい。

(7) 拙稿「豆自伝」(『三島由紀夫研究』二〇二二・四) 参照。なお、「豆自伝」と「友を語る」の目録は、齋藤のリサーチマップ (<https://researchmap.jp/saisa01/>) の「資料公開」で掲載している。

【附記】 本論はJSPS 科研費 20K00346 および 22K00293 の助成を受けたものである。

(ちくどうまろお／本学教授)